

# 「とんびのえのぐ」と創造美育の考え方

林 健 造

## 一、日本の児童画のすばらしい成長

今年の夏、オランダのヘーグでおこなわれた、国際美術教育学会—インセア (Insea) —に出席した日本の代表から、最近報告がもたらされたが、その中で、日本からたずさえていった日本の子どもの絵が、各国から持ちよった作品と比べてすばらしい出来ばえで大いに賞讃されたこと、そして展覧するための選抜に一点もおとすことさえできないほど優秀であったというのである。

これはわが国にとつてはすばらしい朗報である。しかもつい最近インドが主催した世界の子どもの絵のコンクールにおいても、その最高の榮譽を獲得したのは日本の子どもの作品であったが、こんどのように各国の美術教

育のエキスパートが多数参加している権威ある学会、(しかもわが国にとつては因縁づきの……)で認められたことは何といつてもうれしいことである。

いわく因縁づきということは、実は次のようなことがあったからである。

一九五一年、英国のプリストルでおこなわれたユネスコセミナーに戦後久しぶりで国際的な舞台に参加できた日本代表が、そのときたずさえていった日本の児童画がうけた批評は「ノー・クリエーション」創造性が無い」ということであった。

イギリス、アメリカ、カナダ、西ドイツなどの進歩的な美術教育をおこなっている国々の児童画とはどうも違う歩みをしていること

にこのとき気づいたのである。その違いは、日本の児童画は「おとなっぽくて、悪達者で、子ども自体のいきいきした感動や創造性に欠けていたようで」「どうしてこんなにも早くおとなにしたいのか」と不審がられたとも

いわれている。それからあしかけ六年、「創造的な絵」「創造力を伸ばす美術教育者」をあのことばとして、進歩的な美術教育者はひたむきな努力を積みかさねてきた。創造美育はこのような機会から生まれくる運命を担っていた。今日では美術教育のいかなる場でも人も、創造力などということばは慣用語になっているが、当時は何か漠とした意味範囲のようでギコチないものであった。かくて今度ヘーグで拍した児童画について

の絶讃は、その間の教育成果が芽ぶいてきたものと思われ、その喜びも感激もひとしおのものがあるわけである。

もちろん、その榮譽はひとり「創美」が担うものなどという思い上った考え方はもたない。ただ、日本の児童画を、国際的な創造的な方向にむけることに創美の美術教育運動は少なからず功績があつたことは事実であらう

## 二、創造美術とは

さて、プリストルセミナルから日本の代表室靖氏が日本の児童画の創造力について手きびしい批判を受けて帰朝したのが昭和二十六年であるが、その頃数年前から栃木県で子どもの自由な創造性を伸ばすことを主張とする美術教育運動がおこなっていた美術評論家の久保貞次郎氏があり、一方名古屋で自分のメキシコにおける美術教育の体験をいかして新しい児童画教育に新方向を打出していた北川民次氏があつた。

これら三人の見解はまったく一致し、この三人を中心にして、賛同する進歩主義的な美

術教育者や学者、画家等の結集により昭和二十七年五月創造美術協会が誕生した。

その綱領には次のようにうたつてゐる。

○わたくしたちは子どもの創造力を尊び、美術を通して、それを健全に育てることを目的とする。

○わたくしたちは古い教育をうち破り、新しい考え方と新しい方法を探究し、進歩した美術教育を確立する。

○わたくしたちはあらゆる権威から自由であり、日本と世界の同じ考え方のものと励まし協力しあう。

創美は教育の目的を創造力の育成におき、それを遂行する適切な手段として美術教育をおこなうといういわば従来の美術の教育ではなく美術を通しての教育と考えるわけで、すべての子どもたちは生れながらにして創造力をもっているという出発に立っている。

創美の教育方法の表看板としてゐる抑圧解放論とは、子どもたちが他から抑圧され、不当に干渉されることなく、自らの意欲によつ

て、自由に描いたり作られたりした作品は、きわめて創造的である。そしてこのような作品は美術的にもすぐれたものである、というのである。

したがって家庭の抑圧から解放してやることはもちろん、直接指導にあたる教師も従来のようにおとなの技法の注入などはつとめて、排斥されなければならぬ。教師の役割は、子どものよき相談相手となることと、環境を整備することであるといわれている。

それは、子どもたちに環境から加えられる抑圧をとり除き、精神を解放して自由な状態におき、その創造力を励ますことである。

このように自由な精神で描かれた絵は、子どもの心の投射であるから、そこには子どもどもの意識と無意識が表現されており、したがって適切な診断がおこなわれるならば、これらの子どもの絵を通して、その子どものパーソナリティを理解することができるとともに、子ども自体にとつても絵を描くことは心の抑圧を吐きだし一種のカタルシス(感情の安全

弁)の役目を果しているものといえよう。従来の美術教育では考えられもしなかった絵やねんど工作などの感情表現を通してこれを精神衛生や治療に役立てガイダンスの問題として子どもの絵を新たな角度から取上げたことは特筆すべきことである。その診断の基礎はフロイトの精神分析学においている。

以上の考えかたから具体的に幼稚園や小学校の現場での実践の姿は、まずいきいきとした子どもの想像力による表現を強調するために写生画をしない。つとめてテーマ(題材)を与えないで好きな絵を好きなように描かせる。自分の好きなものを描くときは、その表現は確固とした定着を持つからである。そうして、何が描かれたかという問題よりも、どう描かれたかを重要な問題としている。すなわち、のびのびとして、創造的で、明るく、確固たる自信に満ちた、力動的な、しかも誠実感のこもった作品はのぞましい方向であり、概念的な、粗暴で、陰気で、無気力な絵はのぞましくないものとし、評価の基準を創

造力の表現におき、いわゆる指導要録の54321的評価に反対している。

以上を通して教えない指導がおこなわれるわけであるが、この教えないということは教師の直接的な技法指導をさしており、空はこの色でしようとか、バックをぬる方法はなどと教えこまないことを意味している。

### 三、創美のよさと欠けている点

創美の美術教育はいわば一つの民間運動であるが、この新鮮な進歩的な方向は、停滞していた当時の美術教育界に新風を送り、しかも民主的教育の線に沿って大きな発展をとげた。あのやりきれない酒瓶やリンゴの静物画と緑色を生でぬたつくった木立ちと屋根瓦の風景画にとつて変って、子どもの生き生きとした生活経験や想像を描いた子どもらしい表現、大きな紙にのびのびと絵具でかいた幼児の絵、絶望視されていた中学生の迫力と誠実感のこもった絵はぞくぞくと各地に生まれ、前述のように数年を経ずして今や欧米諸国の水準に到達するにいたった功績は大きい。創

美は今年まで年々全国的なセミナーを開催してきた。年ごとに参加会員の数を増してきたが、そのセミナーの企画と運営は実にざん新で、ユーモアとサービス精神にみちていてすばらしい。赤や黄の色シャツや帽子をつけた会員たちが、誰にでも親しみをこめて握手し、歌を唄い、深夜まで討論しあう。その会自体まことに創造的で参加者は最初まったく戸迷うが、帰る頃には精神が完全に解放され、そこから若々しい意欲が燃えてくるというわけである。創造的な子どもを育てるためには、やはり教師自身が抑圧から解放され、創造的でなければならぬ。この点で教師の自己改造はたいせつなことである。

しかし反面、創美についての批判もきびしい。それは、人間の内部(精神)の解放と自由だけで創造的な人間は作られるかという問題である。ゲゼルの狼に育てられた少年にみられるように、環境の力は大きい。むしろ外界の刺戟とその対応においてこそ創造力は伸びていくのでむしろ外部の現実に対する正し

い認識が必要ではないかということや、絵だけの世界にとまらず広く子どももの造形表現のすべてについて考え、近代造形に対応できる造形感覚や技術を育てる角度からは、解放後の教育はどうするかという問題とともに批判されている。

しかしながらこれらのいずれの立場にせよ、創造的なものが根底になることは否めない。したがって、創美はプールに入る前のシヤワーである。といった言葉はけだし名言である。したがって幼稚や小学校低学年の美術教育の方法には全く創美の方法はふさわしく妥当なものである。そして次第に年齢が進むにつれて、よるこびの造形（遊び・本能的な衝動・無意識・偶然・抵抗排除）から考える造形（工夫・理性的活動・意識的計画的・抵抗を越えて）という方向を考慮されなければならぬのは当然であろう。

#### 四、とんびのえのぐ

だいぶ理くつっぱいことを書いたが創美の仲間の早川智恵子氏の山の幼児の生活記録を

つづつた「とんびのえのぐ」という本について、実際の創美のやり方をみつめてみよう。

私はこの春、静岡の西日本図画工作教育大会で幼稚園の分科会の司会をしたが、百人からの教師の集りで、なかなか発言してもらえない。そこでまずこの緊張感を解きほぐすふん囲気作りから始めなければならぬ。こんなとき赤くなったり、青くなったりしないで、ごく自然に（多少勇敢に熱をこめて）、真剣な体験談を（島根弁を使ってユーモラスに）話してくれた女教師があり、彼女の発言により、参加者の緊張した表情はときほござれ、笑い声や、合槌をうつ声がきこえるようになった。しかも彼女の発言は何ら権威ぶっていないから、みんなに安心感と仲間意識を与え、その分科会はその後活潑なのぞましい形のものとなった。その女教師が早川さんだったのである。

早川さんは、いわば創美型女史の典型である。服装も行動も発言もキビキビしている。ちょっと見はドライなアプレ娘を思わせる。

私どもは日頃しとやかさのかげにかくれている女だけを概念的に頭に入れていたからである。彼女の話をきいていくうちに、その話に魅せられ、ついには涙のどるほどの共感にうたれてしまう。

早川さんのように積極的、行動的であるのは、創美の教師の自己改造の洗礼をうけているからである。はっきり、お話ができるのは自己が確固としていて自信に満みているからで、精神がすっきりしているためである。

さて、この早川さんが島根県の一かからのクレオンすらももっていない、貧しい真砂まきさという山村の保育園の一年間の生活記録をまとめた本を出された。この本の内容を要約すれば、幼児本来の姿で生活させることによつて、創造力豊かな造型活動が生まれたという結論になるが、その実例の数々は、指導のアイデアのよさと、ユーモアと涙と愛情にみちあふれていて一息に読ませてしまう文章のうまさとでまとめている。

さて早川さんは十二月のはじめ、小雪のち

らつく日にこの遠い真砂という小さな山村のお寺の保育所に新しい保母として赴任する。

「都会もんじゃて」

村人も子どもたちも冷やかな眼をむける。

早川さんも田舎の生活自体を知らない。数日たったある日、一人の子どもがもじもじと汽車について尋ねる。私は汽車ののってきたと答えてやると急に子どもの眼は輝いてくる。

「そんなら、汽車の話をしてやんちゃい」といいだし、取りつく島のない思いでいた早川さんはおよろこびで話してやる。

汽車ののって通ってきた空や、トンネルや、煙突のいっばいある工場の話をしてやる。子どもたちの体が動く。ついに一本の細びぎで汽車ごっこが始まる。

次に木炭屑でかくと何でもかけることを知らせると、彼らはまだ知らない汽車を描いてみる。石炭をたくこと、ポッポーということ、煙がいっぱいでること、子どもたちは次から次へと早川さんにきいては想像力をたくましくし、地面一ぱいに体全体で描きまわる。

共同するしごとのたのしきも覚えた。翌日雨で園庭に描いた自分たちの絵が後かたもなぐ洗い流されたときの落胆のようすは「汽車は雨をのせていったんか」おおい雨やんでくれ」と雨空への絶叫となって読者の心をつつ。また「とんびにえのぐをもってきてくれ」とたのむ話は宮沢賢治の「風の又三郎」と実によく似ている。

早川さんはとほしい財布をはたいて絵具六色を三箱かかってやる。模造紙を数枚並べて、九人ずつ交代で描く。待ってる組は「描きんちゃい、描きんちゃい」と綱引きの応援のように声援する。生れて始めて色で描き上げたすべての子どもたちの爆発するような感動と喜び。

雪がふれば、雪に顔をおしつけておたがいに顔が違うことを知り、「石ころがあれば石の絵を」と早川さんのすばらしい創造力と、熱意と泉のような愛情は、経済的にまずしい環境も、造形活動にとっては、実に恵まれた環境であることを如実に示してくれている。

環境を活かし、環境の不備を克服していくたくましい子ども、身の廻りから美しさやすばらしさを発見していく子どもに育てていく姿は、えのぐがなくなるとか、東京の子のよう便利な材料がなくてなどと嘆いている教師や、何をしたらよいかわからないという教師のために、早川さんのこの素朴な体験記録はよい道標となるであろう。

子どもと仲よしになる機会をたくみに生かし、想像力に挿さし、子どもの体感性を活かし、よき相談相手となってやりながら、一歩一歩と外界を認識させ、造形本能を多角度に伸ばしていく早川さんのやり方は、いかなれば創美の本質をいかになくいかし、しかもまたそれを越えて、新たな方向を素直な自然の状態でおこなっていったといえよう。

最後に、フィンガーペインティングの創始者ミス・ショーがいったという「本当に貧しいのはだれでしょう」ということばを、私もは心からもう一度味ってみる必要があるように思うのである。